いわき民報

發行所 いわき民報社
平市田町一番地(電話三八一番)
編輯兼發行人印刷人 千輝克己
定價一ヶ月參円 一部十五錢

富ヶ浦病院
内科、小兒科、眼科、外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、皮膚泌尿器科
院長 安田善一
小名濱町電三三番

官僚統制 日炭の廢止を決議
常磐炭田全炭礦遂に立つ

官僚統制の時代は既に過ぎ去つた、終戰後增炭に惱むのも一つには戰時中官僚統制により、ただ濫採した結果であると、常磐、古河、大日本の三大炭礦を始め石城双葉兩郡下の全炭礦に、隣接茨城縣多賀郡下の各炭礦を加へた所謂常磐炭田の各礦代表五十余名は、十二日平市常陽銀行支店樓上に參集、隅田川炭礦の松本榮一所長を司會として協議の結果、官僚統制絶對反對の建前より、先づ現在の日本石炭統制會社の即時廢止、自由統制の實現を期し政府に陳情、猛運動を開始するに決し、眞木桓（小川坑）松井政吉（東新炭礦）酒井潔（久ノ濱炭礦）の三氏を起草委員に擧げ、決議文を作り散會したが、古河礦を始め各礦代表十三名は十三日午前五時平發列車で上京、この決議を商工大臣並に石炭廳に提出、陳情した、尚今後引續き猛運動を續け飽迄も民主化の下に自由統制を標榜して進むとある

消防に手落無し
大竹署長現場證明

平警防團長關内正一氏に對する問責決議案をめぐつて世評ゴウゴウたるものあり、市民から結果を括目されてゐるが、市會調査委員は今十四日午後一時から開き調査を進め、正式に市會へ報告することになつた、然し問題の人關内團長に眞相を訊すことは當を得てゐないため、結局直接指揮監督の位置にある大竹平署長について調査することにならうが、右について當の大竹署長は『警防團に絶對落度無し』と前提し次の如く語る

市會の方から何等正式な問ひ合せがないので何れとも云へぬが、兎も角警防團の問題を市會がとらへ、問責するなどお角違ひでせう、警防團の指揮とか監督は警察署長が行ふことになつてゐる、假に、假にですぞ決議が成立しだとしても意味を爲さぬ、然もあの朝の火災は警察署の近くだつたから自分も逸早く現場へ馳けつけ、直接警防團の指揮に當つたが、故障車は一臺あつたが他の四臺は何れも救水に支障なくガソリンが足りぬとか、バッテリーが無かつたなどの不都合も聞かぬ、火災の時にはよくポンプが遲いとか放水がどうとか愚知を聞くものだ、罹災者とか近所の者にとつては幾等早く來てもおそいやうな氣がする、これが人間の慾圖といふもの、相手は機械を扱つてゐるのだからさう簡單に行かぬ、あの朝のポンプの到着は決しておそく成かつた、常備消防だからといふて四、五人より置かず、これで完璧を期せといふのはいふ方が無理といふものだ、充分とするには現在の四、五倍の増強が必要だらう、現在の規模ではポンプの手入れが何時も完全に整ひ、ガソリンなども用意して準備が早いといふくらいのところだらう、實際平の警防團はよくやつてゐるとほめたいところだ

市民大會で責任追求か

備先會極度に憤慨

問責決議案に憤慨した平警防團消防部の備先會員一同は十三日夜本部詰所に集合、市會の決議案問題について協議する處あり調査の結果に依つては提案者並に贊成者の責任を追求するため市民大會を開き批判するものと見られてゐる

緊急決議案

平市は殊に多額の經常費を投じて平警防團に常備消防部を設置し、平市民の生命財産の保護に任じたり、然るに本年四月十四日早曉富士興業株式會社工場火災に際し、自動車ポンプの出動を見たるもガソリンの充塡及び機械の整備を怠り消火の機能を失し工場並に類燒民家の全燒したるは全く常備消防の職責怠慢と謂ふべし、依つて警防團長は其の責任を明かにすべし

右決議す

昭和二十一年五月十一日

提案者 馬目武之助
贊成者 野崎滿藏
同 木村淳
同 石山一治

附記石山市議は昨報の如く署名脫退を秋原議長へ通告す

電話料金の値上げ增收

六日より電話、電信、小包等の郵信料金値上に依る增收を窓口に覗くと最も大きい黑字は電話の使用料金で、四月分の使用料から見ると五月だけで普通使用料一萬六千圓、市外通話料三万五千圓、計五萬一千圓の增收とある

石炭增産協議

東北地方商工局石炭部では十四日午後二時から湯本町自治會館で石炭增産會議を開き、石炭廳から戸引、大竹兩事務官並に主要炭礦側から各代表出席、第一四半期（六月まで）の住宅建設促進、勞組と勞働時間、福祉厚生施設等を協議した

平局で遞信相談所開設

平局では保險の隣りの窓口に遞信相談所を設け一般者の遞信相談に積極的に乘出す事になつたが尚今年に入つて設置した投書箱は意外に利用が尠く不平、不滿等遠慮なく投書して局員の氣付かない点を指摘して呉れる樣との希望である

市内校輪番で體操講習會

國民修練に替へ

平市内四國民學校の體育主任會議は十三日午前九時から第一國民學校に開きマ司令部から團体修練禁止に伴ふ今後の體育方針を協議した結果、現在の儘で兒童の體操を放任しては体位の低下と明朗性を欠く惧れがあるので體育のシーズンを迎へて四校が双互に研究的態度で進むべく年四回に亘つて各校順番で体操演習會を開き、球技競技を中心とした新体育の建設に向つて進むことになつたが、これと併行して訓導自身の運動についても兒童の演習會同樣年四回位の豫定で運動の會を開くことになつた、なほ今夏の体育は臨海學校や水泳等について具体的に話を進めるべく次回の体育主任會議で決める豫定である

富士勞組も機關紙發行

富士興業磐城工場勞組文化部では、結成以來句會を開催したり登山に、講習に、講演にと各方面に亘り非常に活潑な活動をつゞけてゐるが、今度更らに佐々木智司君等の肝煎りで機關誌の發刊もなすに決定、目下誌名を組合員中から募集中だが、現在〃文化〃と〃觀喜〃等の名も擧げられてゐる

簡保の申込意外に好調

さきに隣組回覽に依る簡易保險の申込は意外に好成績で二千口の割當に對して約三割に達した今月中に是非完遂したいと平局では張り切つてゐる

引揚者聯盟支部を設置

海外引揚者磐城聯盟ではこの程好間並に神谷の兩村に支部を結成した、好間支部會員は二百六十四名、神谷支部六十七名である

平の米配給も遂に遲配
食營目下總動員で集荷に大童

供米の不振と移入米の不圓滑でその日暮しの心細い狀態にあつた食糧營團平出張所では十三日遂に相馬地方から入荷豫定の千三百俵の遲延と郡内の搬入障碍で遂に缺配となつた全所では市郡民に不安あらしめてはと即時トラック二臺を澤渡三阪に急派し約八十俵を引取り、十四日朝十三日配給分の市民に三日分宛配給、十四日は更らにトラック二臺を中村町に急派して百五十四俵を引取ると共に、尚トラックを相馬郡下に引續いて派して搬入を急ぎ缺配を極力防止することにし所員總動員で奔走してゐる、元來石城郡内の供米が完全に出來たとしてもなほ百萬石近い米を移入に仰ぐより外ない本郡では十一月から一月まで會津の早場米二萬八千百五十二俵及び青森からの二千三百四十五俵でやり繰り更に二月から四月までは郡内地元の供出で切拔く一方その不足分を補充するため三月中旬會津米一万二百四十七俵、青森から二百五十三俵の入荷で補つて來たが來月に入つては机上の割當通りに供出も進まず入荷も澁つて來たため益々食糧事情が惡化しこの分では今月を切拔くにも辛い狀況である、從つて今後は十日分宛の配給は難しいか知れぬが、三日分宛とか二日分宛の配給となるかも知れぬが辛棒して欲しいそのかはり配給停止などのないやう萬全を期するとある

引渡しを拒む農村
郡下には尚六千俵の保有米

石城郡内の供出米のうち農村側が自村配給分として食營への引取りを拒んでゐる米穀は約六千俵に上つてをり、これは何れも農民自身の手で管理されてゐるもの、特に某村の如きは千三百余俵の米穀を倉庫に保管してありながら『吾々の自給量以外の分は供出するが自給量までは出せぬ』と主張して引渡を拒否してゐる有樣なので食營でも同村への配給停止を考慮中であるが、この六千余俵が供出出來れば石城地方の約十日間分の數量に當る

意外に早い危機到來

食營平出張所談

五、六月の食糧危機は先づお米の欠配の形で忍び寄つて來た、右について郡市民のお臺所を預る食營平出張所では語る

◇…こんなに早く欠配が來ると思はなかつた、炭礦方面にもこの欠配が波及すると石炭增産にも影響するので努めて喰ひ延しするやう呼掛けてゐる次第です、同所の見解では六月が危機で今月から遲配の儘來月の危機へずり込むと豫想してをります

◇…山野草採取運動も梅雨期に入らないうちに工場を整備する必要があり澁つて配給出來なくなつては何にもならないし地方事務所でもその点各町村へ督勵して遺憾のない樣手配して貰ひたい、また麥の收穫期を控え原麥の儘配給して家庭に迷惑の掛らない樣いまから製麥の完備にも力瘤を入れて貰ひたい

平市内夕刊實施

印刷工場加納活版所の犧牲的協力に依つて今十五日附發行の新聞から愈々待望の夕刊に改めました。一層の御援助を切望致します

いわき言

▼平市にも遂に主食糧の減配が來た『福島縣は大丈夫』と各地の飢餓を對岸の火災視してゐた嫌ひはなかつたか母家に火がついてから水だポンプだと騒ぎ廻つても手おくれだが平地方の食糧事情はこれでまだよい方だ

▼時は新緑の候也、山野に草根を採るもよい、海に海草を求めることも奬める、各々が各々の創意と工夫に依つて今夏の飢餓を突破するやう努力すべきことを苦言する

▼農村の一部には割據主義を執り『自村配給確保』と稱し保管米の倉庫を固く鎖して引取り未了米の引渡しを拒否するものがあるとか、非民主的な封建性を嘆ずるもの寸言子のみであるまい

▼都市住民も社會構成分子であり、都會人も又生産の半面に寄與するものであるから協力的態度に出てほしいものである

文化團体大同團結へ
早くも機運動き下準備へ

終戦後結社、言論の自由の波に乗つて、各地に文化運動が活潑に開始され、幾多の文化團体が誕生、一、二拾つてみても〃日本青年文藝倶樂部〃を始め學生層中心の苔會、磐城青年會、青年思想研究會、草野村の土筆會、内郷町の自由クラブ小名濱の青年聯盟、赤井村青年會等々十指に余る程、これに既成の團体を加へるときは數へ切れぬ有樣であり、且つ各團体が夫々獨自の立場で活動してゐる始末である、激動の中をゆく今日無理からぬことながら、些細なゆきがかり等は捨てて大同團結すべしとの聲も昨今高く、今度勞組文化部を中心に、佐々木智司氏等により〃勤勞青年文化聯盟〃が二十六日に結成式を擧げることになつたが、更らに一部からは、もつと範圍を擴大して平、石城に限らず濱通り地區は勿論、郡山部まで加へての一大聯盟を結成せんとの議が起り、早くも下準備が始められてゐる、何れにせよ文化戰線が漸く統一の氣運に向つて來たとは喜ぶべき傾向と歡迎せられてゐる。

日本青年文倶改組
部制も確立され新活動へ

去る三月十日結成式を擧行以來活潑な活動を開始してゐる日本青年文藝倶樂部では、一層團結を强化、新文化運動に挺身すべく組織の一部を改革、役員も左の如く決定した、新組織は倶樂部内を文化、企劃、共濟、會計の四部を設けると共に、正副會長の下に評議會を結成、一切を自主的に運營にしやうとのもので、文化部内には更らに創作、演劇、音樂、美術等の部を置き企劃部では今後の活動方針に基いての計劃を責任を以つて進めると共に、共濟部では企劃部と連絡の上倶樂部員の凡ゆる相互共濟施設を行はんとするもので今後の活躍振りは各方面から期待されてゐる

◈顧問中河與一　中河幹子　上林曉　山下武郎　林みどり　菊田久利　花柳登代藏　杵屋十久江　◈會長川内潔士　◈副會長菅田甫　◈評議員會長諸橋富彌　◈企劃部長延松正　◈文化部長諸橋富彌　◈共濟部長折ノ内長次郎　◈會計部長折ノ内長次郎

日炭クラブも誕生
機關紙ながれも發刊さる

日本石炭平出張所では所員の親睦、文化の向上を期する目的で去る四月〃日炭倶樂部〃を結成した、組織は所長の下に企畫部を設け、その中に文化、体育の兩部を設置、文化部は更らに文藝部、辯論部、演藝部の三部に、体育部は運動部、競技部の二部に分類、文藝部では日本青年倶樂部員の關内三夫君を責任者として機關紙〃ながれ〃を發刊すると共に讀書朗讀會、書籍の購入管理を、辯論部は講演、座談會、辯論大會、講演、講話會の斡旋を、演藝部はレコードコンサート、音樂演奏會、演藝大會音樂演劇研究會を、運動部は登山、水泳、キャンプ、ハイキング、体操を、競技部は運動會、野球、籠排球、競歩等を催さんとするものとある、尚機關紙〃ながれ〃は綴つたものとして好評を拍してゐる

青年文倶に 音樂部
名も嬉し若人

演劇部の華々しい旗上げを行つた日本青年倶樂部では、今度更らに組織强化と共に鐵道關係の〃雲雀樂團〃をも抱擁したので全樂團を中心にメンバーの擴充强化を行つて新に音樂部を設置その名稱も〃若人〃と命名したが近く第一回の演奏會を開催すべく猛練習をつづけてゐる

佐々木吾則　渡邊宏　倉持高治　古田部千代子　志賀喜久子　小野さき◈會計長谷川浩子　◈監査星野義寛　小林吉藏

第一通信も 要求提出
勞組結成と共に

平市新川町第一通信工業株式會社從業員は十二日勞組を結成すると共に十三日に至り1勞組の承認2組合の經營參加3組合員の人事並に給與事項の組合管理4職員工員の名稱並に差別撤廢5基本給平均二倍半引上6家族手當扶養家族一人に付月百圓の支給7物價手當組合員一人に付月三百圓支給8工員の月給制以上八項目の要求書を來る十八日迄の期限付きで會社側に提出就業鬪爭を開始した、尚役員は左の通り

◈組合長缺員◈幹事長野木義三◈幹事馬目濟　金澤正美

山元に眠る 木炭一掃
滯貨三万六千俵

平署では管内の木炭滯貨が三万六千六百俵に達してゐる現況に鑑み、一般が木炭不足を喞つ折柄こんなに山元に眠らせて置くのは遺憾だと、十日磐城貨物自動車その他の輸送關係者打合せ會を開いた結果、十二臺のトラック及び小型車荷馬車の應援もとめて、一氣に搬出せしめることとなり先づ川前の一万一千俵は、トラック三臺で九日間に、永戸の八千三百俵は同じく三臺で十日間に、三阪澤渡の七千三百俵は代燃トラックや荷馬車等七臺で十日間に搬出の計劃を樹て即時實行に移した

簡便車入荷
隣組共同常備推奬

平市田町一番地（中央通り）へ便利な木製文化リヤーカーが入荷した、これは極めて單便な手押車で價格も安く、隣組などで共同購入し、配給品などの扱ひに至極便利であるから隣組單位に共同常備をお勸めする

B一號が最も理想的か

A一號五四〇圓　A二號四九〇圓　B一號一五〇圓

開放
投書歡迎　紙上匿名可

爭議とサービス

平の電燈會社も經營管理とやらに入つて東北配電會社全体の爭議鬪爭を開始した。このため巡回修理班を設けたり、戸別訪門などで不良箇所を修繕に努め或ひは各種機具の無料檢査などをして電力や電燈の需要家へサービスするといふのである。至極結構なことです、吾等にとつては爭議がいつまでも永く續いてくれた方がよい。何故かと云ふに鬪爭に勝利を得るには大衆に愛され、大衆を味方にせねばならぬから勝利を得るまでサービス滿点に努めるといふ爭議團側の云い分だから、爭議中は需要家を足場にして鬪爭に勝つとケロリと忘れ、サービスを廢することになるから、元の木阿彌といふことに落るのではないかこの意味で何時までも爭議が續き、彼等がサボル暇のないやうサービスして貰ひたいと願ふものである。

▼最近に於ける勞働爭議の傾向を見るに多くは爭議に入つたからと働くことに努力するやうだ。これでは爭議をやらぬ前はサボツテゐたのでないか？と資本家側に突込れても一言もあるまい。要求を貫徹するには勿論生産能率を向上させねばならぬ働くものは資本家側の立場も一應考へてやり、資本家も又刻下の社會狀況を考慮して働くものゝ生活を見てやることに勞資協組が生れ、生産が增進する、爭議にのみ訴へて社會不安を增長せぬやう勤勞者側の自覺が望ましいものだ。

▼東北配電平營業所の需要家サービスも、この意味で爭議に關係なく將來とも永續させるやう强調する。（武藏山人）

生活と文化
哲學の時間
千輝克己

時間を哲學的に取扱つた哲學者としては古代にアリストテレスがあり、中世にアウグステイヌスがあり、近代にカント、ヘーゲルがある。現世紀に入つてからヴント、ジェームス、ベルグソン、ラッセル、ハイデツカーなどがある。

私は私自身の痛切な問題として此等の哲學者の說を一通り味つて見た。が、どれも私の理知の要求を幾分か慰めて異れたゞけで、私が時間といふ先驗的な存在に對して抱いてゐる懷疑を解いてくれなかつた。

アウグスティヌスの『告白錄』では時間といふものは停止しない、連續してゐるといふ所に目をつけてゐる。未來より現在へ來り、現在より過去へ過ぎゆくといふ此の移り行く事實に出發して時間の本質を捉へやうとしてゐる。『若し何物も過ぎ行かないとするならば、如何なる過去も存在しない。若し何物も未來から來ないとするならば如何なる未來も存在しない。そして若し何物も吾々の前に現存しなければ如何なる現在の時も存在しないであらうといふ事は確實に言ひ得る』と逃べてゐる。

カントは宇宙といはふか、人生といはふか、兎に角人間の住んでゐる所では、人間の思惟の働いてゐる所では時間、空間といふ二つの先驗的形式（人間の經驗に先立つて世に存在してゐるもの、これをどうすることも出來ぬといふ意味で經驗を超越してゐるもの）を立てなければ何事もはじまらないと考へた。これを簡單にいへば縱の柱と橫の桁とがなければ建築物は出來ないといふのと同一だ。カントの時間空間並立說に對してベルグソンは時間の方が空間よりも根本的だと見た。彼の『創造的進化』や『時間の直接與件論』には『時間は空間でもある』といふ考へが、換言すれば空間は時間から派生させることが出來るといふ考へが說かれてゐる。空間と同列に置いたカントの時間は、實は時間の本質を穿き違へたもの、即ち理知によつて作り上げた通俗的な時間に外ならぬと評してゐるのである。

ベルグソンもハイデツカーも時間が自由の基礎をなすと論じてゐる。これは未來を時間の本質と見たコーエンやギョーの考へと一致してゐる。『時間は未來に向つて進行するところの内的前途である』とギョーはいつたのである。

先驗的存在であり持續である時間は、生ける人間には誰にでも惠まれてゐるのだ。これを人間の意志に依つて改變することは出來ない。たゞ人間は時間を活用して創造の營みをなし得るだけである。この意味に於いて私は時間の本質は脫我的のもの沒個人的のものだ考へる。だから時間は自由の基礎だと哲學者が口を揃へて唱へたところで人間の社會生活乃至現實生活には何等かへるところはないであらうと信ずる。

萬葉集から
狹野處女
みつか

古典の王座を占める、歌の聖典、萬葉集の卷の十五には、遣新羅使人等の歌百四十五首と中臣朝臣宅守と狹野茅上娘子の贈答歌百二十七首がおさめてある。この相聞は狹野の娘子が、越前に下る宅守との別れ際に歌つた四首から始つてゐる、即ち

△

足引の山路越えむとする君を心にもちて安けくもなし

△

君が行く道の長道を繰りたゝね燒き亡ぼさむ天の火もがも

△

わが背子がけだし退らば白拷の袖を振らさね見つゝ忍ばむ

△

この頃は戀ひつゝもあらむ玉櫛匣あけて復ちより術なかるべし

以上の四首である、歌意は第一首は、山路を越えて遠方へ行かうとせられるいとしい方を心中に持つて思ふてゐるのでゆつたりした心持もないといふものでなか〳〵表現法が奇で傑作と思ふ、第二首の意はこれからいとしい方が入らつしやる道の遠い距離を手繰り寄せ、疊み重ねて燒いて、なくして終ふことの出來る天の火が欲しいものだ、さうしたら越前と都との遠い距離もなくなるだらうからといふもの、第三首は若しも貴方がどうしても行かなければならないので、都をお下りになるやうならせめて袖を振つて下さい、それを見ながらお慕ひ申してをりませうといふもの最後はこの中は焦れても居られやうが、公然ともう再び寄り合ふといふことはとても其のでだてがながらうと思はれるといふもの、第二首の〃長道〃は〃ながで〃と讀む第三首の〃退らば〃は〃まからば〃と讀む、第四首の〃玉櫛匣あけて復ちより〃は櫛を入れる箱の蓋をあけて再びぴつたりと閉ぢるやうに二人が再びぴつたりと寄り添ふとの意で玉櫛の玉は美辭である以上四首何れもか弱い女の神がゝりしたやうな烈しい情熱が感られてゐる、萬葉乙女のこの燃ゆる情熱をみるとき、現在の乙女はどう感じるだらうか、特に第二首は傑作であらうと思ふ。最後に二人の人物紹介をしやう中臣朝臣宅守（なかをみあそんやかもり）も狹野茅上郎女（さぬのちがみのをとめ）も共に奈良朝中期の人、茅上の處女は齋宮寮（いつきのみや）の御藏役所に勤めてゐた女孀だが齋宮の男子禁制の掟を破つて宅守と通じたゝめ罪に問はれ罪ぜられ、宅守は越前に流れたのである、その際の別れに歌つたのが以上四首だが、宅守は後許されて天平寳字七年從五位下を授けられた、二人の相聞歌百二十七首いづれをみても情熱の燃ゆるにまかせての烈しい歌が多い。